

●研究ノート（査読を経たもの）

# 東京・青山の都市史 ——1950年代～1970年代

篠崎開

## 目次

---

1. はじめに
2. 青山という「場所」
3. VAN
4. おわりに

## キーワード

---

青山（Aoyama）  
現代都市（contemporary cities）  
VAN（VAN Jacket）  
ノード（Nodes）  
場所（place）

●NOTE (REFEREED)

Urban History of Aoyama in Tokyo: 1950's to 1970's  
by KAI SHINOZAKI

## 1. はじめに

本稿の目的は、東京・青山の歴史研究、とりわけ、その近現代化のプロセスの解明を通して現代都市の一局面を捉えることにある。

青山通り（三宅坂を起点に宮益坂および金王坂下まで）をひとつの中心の軸線とし、この軸線から南北およそ 300～400m の奥行きをもった帯状の領域史の展開をたどった。これらの分析素材としては主に、1950 年代～1970 年代における渋谷区・港区の住宅地図および関連雑誌・記事等を用いた。

青山の都市性に大きな影響を与えたものとして、1950 年代の紀ノ国屋（スーパーマーケット）の開店、60 年代の VAN（ファッション）の活動、70 年代の都市建築（複合住宅、文化施設）の推移などが挙げられる。これらの 50～70 年代のダイナミックな変化を追跡すると、都市軸の表と奥にノード的空間（＝「活動の節合点」的空間）の形成と展開があったことが判明する。この空間の形態は 1950 年代から 1970 年代にかけて青山に、個別的ながらも徐々に集積・重層していったと考えられる。また、青山通りの東西の縦方向の軸線にはじまったこのノード的空間の重層化は、南北横方向への空間の連鎖・伝搬をもたらした。本稿では紙数の関係から VAN に焦点を絞る。

## 2. 青山という「場所」

私は青山にあるオールナイト営業のスーパーマーケットの場所を教えた。「そこの中にあるコーヒー・スタンドで待っててくれ。五時半までには着けるから」

(p. 254)

村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』<sup>2)</sup>の物語はこうして動き出す。「世界の終わり」を告げた女と主人公の男とが、世界を終わらせないために

---

1) 本稿は 2018 年青山学院大学大学院総合文化政策学研究科文化創造マネジメント専攻修士課程に提出した「東京・青山の都市空間史序説 その近現代化と公共性をめぐって」の一部である。

2) 村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド（上）（下）新装版』、新潮文庫、2010 年 / 初出 1985 年。

も出会うべく、現実の都市でその約束を結ぶ。その場所が青山であり、スーパーマーケットであるのだ。結局、二人は青山のスーパーマーケットで会うことはできず、約束は果たされないまま、物語は「ハードボイルド・ワンダーランド」の地下迷宮の世界へと入り込む。その後、「世界の終わり」と「ハードボイルド・ワンダーランド」の二つの物語が織り合うように展開してゆくのであるが、物語のクライマックスともいえる場面で、二人は「ハードボイルド・ワンダーランド」から見事生還し、現実の世界に戻るのであった。二人が戻ったその場所こそが、またしても青山の地上なのである。地上に上がった二人が最初に向かった先は、青山のスーパーマーケットであった。

パイプの出口から青山一丁目の駅まではそれほどの距離はなかった。我々は線路の上を歩き、電車が来ると支柱の陰に隠れてそれをやり過ごした。(p.225)

(中略)

地上には雨が降っていた。針のような細かい雨だが、地面や木はぐっしょりと濡れていた。おそらく夜のあいだずっと降りつづけていたのだろう。(p.231)

(中略)

人々はみな傘をさして歩いていた。傘を持っていないのは我々二人だけだった。我々はビルの軒先に立ってアクロポリスの遺蹟でも眺めるみたいに長いあいだ街の風景を呆然と眺めていた。雨に濡れた交叉点を色とりどりの車の列が往ったり来たりしていた。(p.232)

(中略)

我々は近くのスーパーマーケットに入って、入口近くにあるサンドウィッチ・スタンドでコーン・ポタージュをふたつとハムエッグのサンドウィッチをひとつ注文した。(p.233)

この物語は、フィクションの世界である。しかし、ここには青山の都市としての性格、言い換えれば青山のもつ潜在性が、リアリティをともなつてわれわれに訴えかけてくる。

では、青山とは一体どこか。そしてどのようなところか。青山という場所は、実のところ未だほとんど明らかにされていない。この青山の場所の問題について、『青山文化研究』<sup>3)</sup>において、杉浦勢之の分析がある。杉浦によると、青山は「言葉＝名前」

---

3) 井口典夫 編著『青山文化研究』、宣伝会議、2011年、杉浦勢之「第1章青山の源泉」p.20。

であり、青山は言葉の「重ね書き」が本来、起きやすい場所であるという。<sup>4)</sup> さらに加えて、青山には漢詩の、「人間至所有青山」という「運命」の意味をも「重ねる」ことができる、ということと同著で指摘している。<sup>5)</sup>

青山の地名の由来は、主に二つの説に絞られている。まず、江戸幕府草創期より青山常陸介忠成氏が、この地に移り住んでいたことによるもの（青山氏の名前自体は、群馬県の実際の青山の名前から取られているのであるが）。二つ目は、この土地そのものが、「緑の樹々多き青き丘陵」<sup>6)</sup> であることの地理的由来である。

杉浦が指摘しているように、恐らくこの二つの由来は相互に「重ね書き」されるようにひとつであり、二つの由来ともに呼び名として正しいものと考えられる。この「重ね書き」とはつまり「書き」言葉、すなわち文字の記号的「重ね書き」としての呼び名であるといえる。

しかし、青山は記号的「重ね書き」ばかりではない。青山には、もうひとつの「呼び名」がある。それはまさしく「読み」言葉、すなわち、歌的「重ね読み」である。このことを知らせる史料として『赤坂区史蹟写真帳』<sup>7)</sup> に収められている「赤坂區郷土史概要 各町の由来」がある。これによると、上述の青山の二つの由来にも触れた上で、次のような興味深い見解が披瀝される。

赤坂より一條の大路此の丘陵を経て、澁谷世田ヶ谷に出て溝口に向ふ。俗に青山街道と云ふ。蓋相州大山に至る道であるから大山と、青山相混じたものか。

(p.17)

これまで、大山清山説はまったく流布していない。しかし、声に出して「読んで」みれば、あまりに自明のことで、なるほど確かにと思わざるを得ない。「おおやま」と「あおやま」、この「重ね読み」は大いにありうる説である。

大山街道は、江戸初期に整備された街道であるが、その淵源をたどると室町時代にはこの道は相模街道（中原街道）としてすでに交通の要所を担っていたことが知られる。また、この街道と周辺の地は『赤坂区史蹟写真帳』によると、「起源はさらに平安いやそれ以前まで遡れるのではあるまいか」<sup>8)</sup> という見方をしている。

---

4) 同上, p. 21。

5) 同上, p. 27。

6) 青山学院編『青山学院 100 年』, 青山学院, 1974 年, p. 15。

7) 赤坂区教育研究会 編集『赤坂区史蹟写真帳』, 1951 年, p. 17。

8) 同上, p. 8。

いずれにしても、青山氏以前も以後もこの周辺が台地を貫く陵路としての性格がきわめて強かったということは事実である。したがって、青山は歴史的に、道に始まっていたともいうことができる。青山の由来と、その「場所」については一概には断定することはできない。しかし、このこと自体が青山という地名に内蔵される場所の性格であり、力なのではないか。場所の地名について、建築史家の鈴木博之は次のようにいう。

地名は、断片化された機能に全体性を恢復してくれる護符の役割を期待されている。断片化してしまえば、結局は無言で機能が果たされてしまう行為に、意味を与え、全体性を与えてくれるものとして、われわれは都市内の地名を口にするのだ。<sup>9)</sup>

青山の地は、土地の「重ね書き」と「重ね読み」によって、歴史的にさまざまな「呼び名」が込められていた。だからこそ、われわれが「青山」と「呼ぶ」（口にすると、始めて、青山は青山の場所を確からしいものとするのではないだろうか。

### 3. VAN

だから、むしろ青山がわれわれとしてファッション的に面白いと思うのは、そこにスーパーがあるということ、これは青山のもつ特性だということ。あそこに文化のにおいがあるんじゃないか。紀伊国屋というスーパーは最も東京でファッションナブルなショップだと思うんです。<sup>10)</sup>

この言葉は、日本のファッション界を牽引したヴァンヂャケット<sup>11)</sup>（以降はVANと表記）の創業者である石津謙介によるものである。石津謙介率いるVANが、アイビーをはじめとしたファッション業界そのものに与えた影響と功績はあまりに大きい。しかしここでは、ファッションそれ自体の偉業ではなく、石津謙介のもつ類まれな都市的センスに注目したい。

石津謙介のもつ都市的センスとは、どのようなものなのか。それは、石津がVANを日本橋から青山に移した経緯にその端緒を見ることができる。『VANから遠く離れて－評伝石津謙介』の著者である狭山一郎によると、石津は「東京営業所を日本橋か

9) 鈴木博之『都市のかなしみ』、中央公論新社、2003年、p. 32。

10) 建築画報社『建築画報152』、建築画報社、1981年、p. 47。

11) 1951年有限会社ヴァンヂャケット設立。1964年本社および営業所を青山へ移動した。

ら青山に移した理由を謙介は好んで語った。東京の盛り場の中心が浅草から銀座、銀座からモダン・イメージにあえて背を向けるかのように新宿へと移動していく中で、青山を選んだことに相当な自信を持っていた」という。<sup>12)</sup>

ここで一度、VAN が青山に移ってくる前の青山がどのような空間であったかについて、1950年代の住宅地図<sup>13)</sup>から一瞥しておきたい。

まず、青山通りが都市構造の背骨となる軸線であったということを住宅地図から第一に読み取ることができる。東西に走るこの青山通りは、歴史的に交通の軸として使われ続けてきたことはすでにみたとおりである。1904年から1963年までの期間には、三宅坂から青山四丁目を結ぶエリアを都電が走っており、青山通りがひろく親しみをもたれる契機のひとつとなった。青山通りは、都電と当時普及しつつあった自動車の二つの交通手段が取られており、青山通りは江戸から明治そして昭和の1950年代にいたるまで継続的に、青山における中心軸でありつづけた。青山通りの南側には代官山方向へと伸びる八幡通り、六本木方面へと伸びる骨董通りが伸びる。また北側には、原宿方面の明治神宮へと伸びる表参道が走り、この交差点の反対側には御幸通りが伸び、南とつながっている。これら複数の分岐する通りが青山領域に幅をもたっている。

さらにこの住宅地図をみてゆくと、主軸道路とも言える青山通りの両側には、道に沿うようにして整然と町屋が形成されていることがはっきりと見て取れる。敷地のあり方としては、通り沿いの正面入り口（間口）は狭いものの、奥行きをもった短冊型地割を成しており、およそ同規模の建物が連坦して青山通り沿いの都市組織を形成している。

住宅地図に書かれたこれらの具体的な名称を見てゆくと、衣食住に関わるさまざまな生活環境の場が集積していたことがわかる。衣においては、衣料品店、洋服店、スポーツ品店、下駄屋、時計屋、メガネ屋、美（理）容院。食では、青物屋、食料品店、生肉屋、お茶屋、そば処、食堂、コーヒー店、喫茶店。住では、不動産屋、書店、文具屋、ふとん屋、カメラ屋、写真館、接骨院、薬局など、多種多様の賑やかな商業施設が展開する。

一方、青山通り沿いのこの活動空間に対比するようにして、この奥（南青山・北青山）には、静かな個人住居が形成されている。住宅の敷地の様相は、先の短冊型地割のそれとは異なり、一般的な戸建の矩形敷地であり、その多くが個人住居である（図）。

12) 佐山一郎『VANから遠く離れて 評伝石津謙介』、岩波書店、2012年、p.133。

13) 『全住宅案内地図帳 港区』、住宅協会、1959年 / 『全住宅案内地図帳 渋谷区』、住宅協会、1957年。

さらに、この住宅地図において注目すべきところは、この時すでにこの青山に外国人住居者がかなりの数いたということである。とりわけこの例は、港区と青山学院に隣接した領域に見られ、住宅者もカタカナないしローマ字表記から分かる通り、外国人住宅が建っていた。さらに一部の住宅では「ガレージ」、すなわち車をそなえる駐車場をもっていた、ということはあわせて注目に値する。駐車場については、外国人住宅ばかりでなく、日本人住宅にも見られ、「ガレージ」と地図表記にも記載されている。つまり、青山の住宅領域には、日本人の住居者ばかりでなく、外国人居住者がいたほか、さらには車を持った生活スタイルも早くから導入されていたと言える。



図 1957 年住宅地図（部分）

このような青山通りを軸線とし青山の稠密な都市組織が形成されているなか、東京オリンピック開催の年の1964年VANは青山の地に移ってくるのである。石津謙介がVANを青山へ移した理由はさまざまな形で言い伝えられているが、いずれにしても石津が青山を気に入る、総合的な可能性を感じ判断したことには間違いない。なによりも石津謙介は青山の都市性を捉えるとき、青山通りが都市の軸線を成しているだけでなく、将来性をもつ場であることを見抜いていた。石津自身、青山について次のように述べている。

青山というところが場所的に通過地域であるということ。それからもうひとつは、青山というところが場所的に、標高的に一番高いということ。ということは、そこから原宿に流れていき、六本木、赤坂に流れていくというような意味

で、あそこにあるのが一番イメージ的にはいいんじゃないか。高いところにあるとみんな流れていくぞというような……非常に抽象的ないい方をすれば<sup>14)</sup>

石津は青山の都市性について、この他に「スポーツ」、「緑」を挙げた上で、本来このような場所ではファッションを「売る」ことは難しく、メーカーとしてそのイメージを「つくる」可能性の方が青山には当てはまる、という。<sup>15)</sup> このことについては、青山が「通過地域」であるという先の指摘と合わせて考える必要がある。つまり、石津の都市的センスは以下のようにまとめることができる。

たしかに、青山は本来、「通過地域」で「流れ落ちて」しまう。なぜなら歴史的に、交通としての軸線の性格が強いからである。しかし一方で、通過するからこそ、動的な移動の魅力（それはファッション性に通ずる）がそこにはある。したがって、「通過しつつかつ留まる」空間を「つくる」（売るのではなく）ということこそが、青山のコンテクストに求められている、このように言えるだろう。そして、このイメージそのものがまさに「ファッションをつくる」（＝ファッションメーカー）ということに合致するのである。

このような都市的センスをもった石津謙介がつくったVANの青山における最初の拠点が、青山通りの北側と外苑西通りとの角地（三丁目二番地）であった。ここに建つ東京オリンピック開催年の1964年に建てられたAYビルにVANは入るわけであるが、このAYビルはVAN所有の自社ビルではない。賃借人としてVANが移り住んでくるのであった。

石津謙介の長男、石津祥介はこの「借りる」精神がVANにとって重要であったということを今でも語っている。また、石津祥介によるとこのAYビルを石津謙介が選んだ理由としては、青山通りのもつ歴史性に加えてAYビルが建つ場所そのものが、ファッション産業にとって魅力的であったことを明かしている。

AYビルは、「アーデンヤマナカ」という頭文字をとったビルでして、もともと奥にあった美容学校の「アーデン山中美容院」が、青山通りの拡幅工事によって表に出てきたということです。その青山通りの角地に建つ「AYビル」を借りて青山に進出したわけですが、この「借りる」ということを父（石津謙介）は常に大事にしておりました。自社ビルをもたない、不動産をもたない、所有しない、

14) 建築画報社『建築画報 152』、建築画報社、1981年、p.46。

15) 同上、p.47。

「借りる」ということ、そのことによってあちこちに広がる、自由なイメージをもつことができる。箱を借りてそのなかで自由にやる。

（中略）

父にとって、当時の青山通りや表参道の姿は、天津租界時代の面影を思い起こさせ、外国文化が漂う静かなイメージでした。このイメージは、周辺の新宿や六本木ではなく、やはり青山にありました。青山は、そのイメージだけではなくて、青山通り自体も、ファッション産業にとって、非常に都合の良いものでした。ファッションといっても、納品や出荷といった、現実のものの物流が欠かせませんから、車が入れるか、この意味で青山通りは交通の要所としても理に適っていたわけです。<sup>16)</sup>

つまり、土地自体の所有者ではない第三者の所有者が実際の都市活動の主人公であり担い手となる、新しい土地の所有のあり方をみる事ができる。石津祥介が強調したように、既存の「箱を借り」て、むしろその中で自由に活動するという都市の新しいスタイル（住み方）は、この1964年以降の青山のひとつの特徴となる。土地そのものは所有していないにも関わらず、しかし実は、都市の性格を大きく担うことができる（利用する）という、その先見的かつ実践的な実例としてVANを捉えることができる。

東京オリンピック開催の1964年から1970年代にかけての、VANと青山の結びつきはとりわけ大きいものであった。なかでも、「VAN TOWN AOYAMA」と掲げた1970年代は、青山＝VANといっても過言ではないほどに都市とファッションメーカーとの強い結束をもたらした。

青山へ最初に拠点を構えたAYビルに加えて、さらに渋谷方向へと進んだ青山通りの同じく北側にVANは新たに別館を設ける。1973年VANは、この場所に建つ青朋ビルに賃借人として入る。このビルの北青山三丁目5-6という住所をそのまま利用し、「VAN356 別館」という名称がつけられた。

VAN356 別館にはVAN自前の駐車場が設けられたのであるが、石津謙介は通過・移動する車とむしろ真逆の、滞留・回避する歩きにこそ注目していたと推察できる。この駐車場は、青山通りをある種の「広場」に見立て多くの人々が歩きひろがることを期待した、いわば「活動の拠点」として考えることができる。

---

16) 2018年8月17日、石津事務所（港区南青山）にて石津祥介氏、石津墨氏へのインタビュー。

駐車場の他に、VAN356 別館には「VAN99 ホール」と呼ばれる多目的な文化スペースもつくられている。VAN の収益を還元する場として、客席 99 席入場料 99 円の VAN99 ホールが誕生する。VAN99 ホールそのものは、空間としては小さなものであったが、そこで催された演目は実に多様で、また多彩な顔ぶれが交流しておりいまに通じる強い先鋭性と影響力をもっていた。たとえば、音楽においては 1975 年当時のジャズ専門雑誌で紹介されるほど、注目を集めていたのである。この記事からは、当時の VAN99 ホールの様子とその豪華な内容を伺い知ることができる。

ヤング向けの服飾メーカーとして知られる VAN ジャケットが、その利益還元の目的でユニークな企画を低料金で提供していることは、つねに定評のあるところだ。音楽以外にも寄席や芝居やプロ・ボクシングなんてまであって、実に楽しいのだ。ボクもいつだったかこのステージで、岡本太郎、益田キートン、油井正一の各氏と公開対談のお相手をさせられたり、指揮者の石丸寛氏となにやら対談してみたり、北村英治の演奏を古今亭志ん朝と 2 人で司会してみたりと、まあなんとも多彩でおかしいのだ。そうした催しのひとつに、今年の 6 月から、一週間ぶっ通しで色んなスタイルのジャズを聴かせてくれる企画が始まり、その盛況ぶりは本誌 8 月号の本欄でも紹介した通りだ<sup>17)</sup>。

この記事から、VAN99 ホールが石津謙介の審美眼（世界観）によって、いかに独自の文化的空間をつくり出していたか、ということを理解できる。

VAN が試みたこととは、青山の都市的コンテクストのなかに入り、新しい空間をつくるということであった。その新しい空間とは、「通過しつつかつ留まる」空間の創造であった。それらはつまり、青山におけるノード的空間の形成としてみるができる。

#### 4. おわりに

ノードとは、ケヴィン・リンチ<sup>18)</sup> がいうように、「接合点」と「集中心」としての役割を担った、都市の「活動の節合点」的空間である。本稿では VAN（1960 年代）に絞って分析を行ってきたが、VAN のみならず紀ノ国屋（1950 年代）都市建築（1970 年代）においても共通して「活動の節合点」的空間の性格がみられた。そして、これら

17) 『スイングジャーナル』、スイング・ジャーナル社、1975 年 12 月号。

18) ケヴィン・リンチ『都市のイメージ 新装版』、丹下健三／富田玲子訳、岩波書店、2007 年。

の「活動の節合点」的空間は、完全に閉じた空間ではなく、人々が集い交流する共同的な場であった。

きわめて興味深いことに、青山におけるこうした場合は、いずれの場合も個別の私の領域から生まれ、この私が都市的コンテクストのなかで、その段階性にこそ違いはあるものの、高度な次元において（私性を保持しつつ）集合あるいは開放されることによって青山独自の公共性を獲得していったのである。

江戸・東京の中心領域、たとえば銀座・丸の内などに対して、青山は本来、江戸・東京の周縁部に位置しており従来の都市史研究の空白地帯であった。本稿は1950年代から1970年代の青山の都市史に照準をしばり、それも青山の「内側」からの視点にこだわったそのような視点から見た場合、青山学院大学や紀ノ国屋、VAN、市井の都市建築の形成と展開の歴史は青山という場の都市史そのものであった。本稿が、都市史研究のなかでもっとも研究が遅れている現代都市史にとって一つの素材を提供できれば幸いである。

#### 参考文献・資料

『全住宅案内地図帳 港区』、住宅協会、1959年 / 『全住宅案内地図帳 渋谷区』、住宅協会、1957年。

『全住宅案内地図帳 港区』、住宅協会、1976年 / 『全住宅案内地図帳 渋谷区』、住宅協会、1974～1979年。

村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド（上）（下）新装版』、新潮文庫、2010年 / 初出1985年。

井口典夫 編著『青山文化研究』、宣伝会議、2011年。

青山学院編『青山学院100年』、青山学院、1974年。

赤坂区教育研究会 編集『赤坂区史蹟写真帳』、1951年。

鈴木博之『都市のかなしみ』、中央公論新社、2003年。

佐山一郎『VANから遠く離れて 評伝石津謙介』、岩波書店、2012年。

『スイングジャーナル』、スイング・ジャーナル社、1975年12月号。

ケヴィン・リンチ『都市のイメージ 新装版』、丹下健三 / 富田玲子訳、岩波書店、2007年。

2018年8月17日、石津事務所（港区南青山）にて石津祥介氏、石津壘氏へのインタビューにおける文字起こし。

## Urban History of Aoyama in Tokyo: 1950's to 1970's

by KAI SHINOZAKI

This study attempts to focus on one important aspect which has been embedded in contemporary cities through the historical point of view of Aoyama area in Tokyo.

Aoyama-dori Avenue has been played an essential role for the development of this area. In the 1950's, Kinokuniya, the first American style supermarket in Japan, was opened on this avenue. In the 1960's, it saw the foundation of VAN JACKET, Japanese Ivy league-inspired clothing brand. In the 1970's, urban blocks along this avenue were transformed by the construction of multi-use complex housing and cultural facilities. These elements have made great influences on the modernization of the whole district. Tracking the changes from the 1950's to the 1970's reveals that many node-like spaces, which allowed the interaction of various activities, were formed and gradually accumulated both on the sites facing toward Aoyama-dori Avenue and in off-street sites. Node-like spaces extended through the north-south streets crossing Aoyama-dori Avenue, which is the east-west axis. By this process, the network of the nodes was developed and today's characteristics of Aoyama were formed. In this paper, I concentrate on the case of VAN JACKET for its importance in the development of Aoyama as the district of fashion. In the 1970's, VAN created «VAN 99 Hall» as an experiment of the PR department of the company. It is an important example of node-like spaces. This small theater was a place where various people encountered, collaborated, and exchanged ideas. The important point is that node-like places in Aoyama, represented by «VAN 99 Hall», were not planned by public authority but made and run by private companies and individuals. Because of their privateness, these places could react to each urban context with flexibility and uniqueness, which attracted people.

By the analysis of each node-like space from the 1950's to the 1970's, I hope to present a new perspective for describing contemporary urban history.

*Aoyama Journal of Cultural and Creative Studies* 16 (vol. 10 no. 1, March 2019)